

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13470

研究課題名（和文）消滅の危機に瀕した八重山語諸方言の音声・例文付き辞書作成

研究課題名（英文）Developing word lists of highly endangered dialects of Yaeyama Ryukyuan with sound examples and sample sentences

研究代表者

原田 走一郎 (HARADA, Soichiro)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：00796427

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は消滅の危機に瀕している八重山語諸方言の辞書作成を目的としたものである。音声と例文を付すことに注力し、現代の記録としてふさわしいものを残すことを主眼とした。結果として、八重山語黒島方言と八重山の近隣言語である水納島方言の語彙を収集することができた。黒島方言については約700語、水納島方言については約200語を収集した。しかし、一部で公開の許可を得られなかったものもある。また、辞書作成を通して黒島方言の文法的特徴についても迫った。特に、最終年度に行った形容詞の形態的、統語的、意味的記述ならびに地理的分布の研究はこれまでに琉球語学および日本語学で示されたことのない現象で重要なものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は、消滅の危機に瀕する言語（方言）の記録を作成したことにある。日本国内には消滅の危機に瀕している言語（方言）が無数にあるため、そのすべてを記録することに価値がある。本研究では、特に危機度が高く、かつ、言語的多様性が高い八重山地域と近隣地域を対象にしたため、より研究上の意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：The development of word lists of highly endangered Yaeyama Ryukyuan dialects with sound example and sample sentences was the goal of this research project. As the result, around 700 words of Kuroshima dialect of Yaeyaman and 200 words of Minna dialect, which is neighboring dialect of Yaeyaman, were collected. However, we cannot have consents with some of consultants about publishing the voice online. Through making the word list, the grammatical aspects of Kuroshima dialect was revealed. The morphological, syntactic and semantic description of its adjectives and the the distribution of the related form was pointed out for the first time in the history of the Ryukyuan and Japanese linguistics, making it an important work for this field.

研究分野：日本語学

キーワード：危機方言

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2009年にUNESCOが日本に8つの消滅の危機に瀕した言語を認定した(<http://www.unesco.org/languages-atlas/>)。その中には、沖縄県八重山地方のことばも八重山語として含まれている。これは、相互理解度の観点から、日本語とは異なる別の言語として八重山のことばを認めたものである。

実際、八重山語は消滅の危機に瀕している。たとえば、研究代表者が集中的に現地調査を行っている沖縄県八重山郡竹富町黒島では、伝統的なことばを話すことができるのは40名弱の75歳以上の高齢者のみであり、下の世代への継承はなされていない。

また、これらの言語に関する研究が必要なのはただ消滅の危機に瀕しているからではない。八重山語には標準日本語や他の琉球諸語には見られない特徴が多く観察され、言語類型論の発展に資する発見も行われている。たとえば、八重山語黒島方言においては二重有声摩擦音zzとvvが聞かれるが、これが語中ではss、ffのように無声化、また語頭ではz、vのように単音化することがある(原田2016a)。このような変異の現れ方は日本・琉球諸語の間では極めて特異である。ただ、言語類型論的な観点から見ると、二重摩擦音は「語中で無声」のものが最も一般的であることがわかっている。つまり、黒島方言のこの現象は言語類型論的傾向に合致しているといえるのである。このことから、変異のあり方からも二重子音に関する類型論的傾向について考察しうる、という点を提案でき、また、言語類型論の成果を応用することが日本・琉球諸方言研究に有効である、ということも示した。このように、他の日本語・琉球諸語にはない特徴を持つ八重山語は研究上の価値が高いといえる。

2. 研究の目的

研究代表者はこれまで、主に黒島方言の文法記述に従事してきた(原田2016b)。一方で、同方言の語彙については、現状、語彙リストレベルにとどまっている。そこで本研究では、八重山語諸方言の音声・例文付き辞書の作成を行う。

辞書の作成を通して、八重山語の語彙以外の特徴にも迫る。

3. 研究の方法

本研究の調査は現地調査による。

(1) 語彙リストについて

1つ1つの単語を例文を含めて発音してもらうため、非常に時間がかかる。具体的な面接調査方法としては、標準日本語で、たとえば「頭」はなんというか尋ねたりなどする。例文に関しては、「頭が痛い」はどのように言うか尋ねる場合もあるし、話者にとって自然な例文を作ってもらう場合もある。いずれも、話者の許可を得たうえで録音を行う。

なお、本研究がその方言の最後の記録となってしまうことを意識しつつ、高音質の録音をすることを心がける。具体的にはWAV形式で録音可能な機器を用い、16bit、44.1kHzでの録音を行う。また、雑音がなるべく入らないようにする。話者が気にしないようであれば外付けマイクも使用する。

また、本研究の対象となる言語はすべて高齢のかたのみが使用するものである。したがって、調査に協力してくださるのは全員が70歳以上のかたであり、長時間にわたって調査を行うことは身体的負担が大きい。そのため、一日一回一時間を調査の目安と考え、また、相手の体調に合わせて調査を行うことに注意を払う。

(2) 語彙以外の調査について

文法の調査もあわせて行う。調査方法は同様に面接調査である。

4. 研究成果

(1) 語彙について

当初、黒島方言と、八重山の別の方言を予定していたが、そちらの方言の調査が不可能になったため、急遽別の調査地の選定を行った。その結果、八重山と宮古のちょうど間に位置し、言語的にも「おおまかには宮古方言と八重山方言との中間的特徴を備えていると言える(平山・大島・中本1967)」とされる多良間島の近くに位置する水納島の方言の調査を行うことになった。この調査は集団移住が行われた先の宮古島市の高野(東仲宗根添)集落で行われた。

結果、黒島方言については通算約700の単語、水納島方言については約200の単語が得られた。ほぼすべてについて例文と音声が付すことができた一方、一部の録音の公開の合意が得られなかった。公開のための整理がまだ進んでいないため、これは今後の課題である。

(2) 活用語の形態について

黒島方言の活用に関する論文の執筆を行った。同論文では、黒島方言の動詞、形容詞、コンピュータの活用を記述した。黒島方言の動詞活用は、古典日本語の動詞活用分類とは一致しないものが観察されるなど、独自に注意すべき現象が多々見られる。以下に活用の一部を示す。

表1 動詞1

		多段一般型 書く	多段型「語幹 踊る	多段型存在 いる	二段型 出る
終 止 類	断定非過 去	ハク ハクン ハキ	ブドゥル ブドゥルン ブドゥリ	ブー ブる ブン ブリ	ンジル ンジルン ンジ
	断定過去	ハクタ ハクタン ハキ	ブドゥるタ ブドゥるタン ブドゥリ	ブッタ ブタン ブリ	ンジタ ンジタン ンジ
	命令	ハキ	ブドゥリ	ブリ	ンジリ
	禁止	ハクナ	ブドゥンナ	ブンナ	ンジナ
	意志	ハカ	ブドゥラ	ブラ	ンズ
	推量	ハク パジ	ブドゥル パジ	ブル パジ	ンジル パジ
接 続 類	連体非過 去	ハク	ブドゥル	ブー ブる	ンジル
	連体過去	ハクタ ハクタル	ブドゥるタ ブドゥッタ ブドゥるタル ブドゥッタタル	ブッタ ブッタタル	ンジタ ンジタル
	中止	ハキ ハキティ	ブドゥリ ブドゥリティ	ブリ ブリティ	ンジ ンジティ
	仮定	ハクカ	ブドゥるカ ブドゥッカ	ブるカ ブッカ	ンジカ
	理由	ハキバ	ブドゥリバ	ブリバ	ンジリバ
派 生 類	否定	ハカン	ブドゥラン	ブラン	ンズン
	使役	ハカス	ブドゥラス	ブラス	ンジッサシル
	受身	ハカリル	-	-	-
	可能	ハカリル	ブドゥラリル	ブラリル	ンジラリル
	尊敬	ハキ ワール	ブドゥリ ワー ル	-	ンジ ワール
	継続	ハキ ブル	ブドゥリ ブル	-	ンジ ブル
希望	ハキピサ	ブドゥリピサ	ブリピサ	ンジピサ	

表2 動詞2

		来る	する
終 止 類	断定非過去	フる フン キー	シール シールン シー
	断定過去	フッタ フタン キー	シタ シタン シー
	命令	クー	シーリ
	禁止	フンナ	シーナ
	意志	ヴァー	スー
	推量	フる パジ	シール パジ
接 続 類	連体非過去	フる	シール
	連体過去	フッタ フッタタル	シタ シタル
	中止	キー キッティ	シー シッティ
	仮定	フッカ	シッカ
	理由	フリバ	シーリバ

派 生 類	否定	クーン	スーン
	使役	キッサシル	シミル
	受身	-	シラリル
	可能	キーラリル	シラリル
	尊敬	-	シー ワール
	継続	キー プル	シー プル
	希望	キピサ	シーピサ

表3 形容詞

		アカ類		グッファ類	
		赤い(普通)	赤い(比較)	重い(普通)	重い(比較)
終 止 類	断定非過 去	アカハ アカハン	アカク	グッファ グッファン	グッファク
	断定過去	アカハタ アカハタン	アカクタ アカクタン	グッファタ グッファタン	グッファクタ グッファクタン
	推量	アカハ パジ	アカク パジ	グッファ パジ	グッファク パジ
接 続 類	連体非過 去	アカハ アカハル	アカクル	グッファ グッファル	グッファクル
	連体過去	アカハタ アカハタル	アカクタ アカクタル	グッファタ グッファタル	グッファクタ グッファクタル
	中止	アカハ アカハティ	アカク アカクティ	グッファ グッファティ	グッファク グッファクティ
	仮定	アカハカ	アカクカ	グッファカ	グッファクカ
	理由	アカハリバ	アカクリバ	グッファリバ	グッファクリバ
派 生 類	否定	アカハ ナー ン	アカク ナー ン	グッファ ナーン	グッファク ナー ン
	なる	アカハ ナル	アカク ナル	グッファ ナル	グッファク ナル

(3) 特徴的な表現について

語彙項目追加の過程で明らかになった黒島方言に特徴的ともいえる表現に関する論文を執筆した。具体的には、黒島方言における係助詞「du」、および、黒島方言の若者ことばともいえるいわゆる「標準語」(黒島で用いられている伝統的方言に強い影響を受けた「標準語」)の「が」の共通性に関する論文を執筆した。さらに、これらに対する観察をとおして、現代標準日本語の「が」に関する考察も加えた。研究上のデータベースとして、これまでに収集された談話資料などの録音資料を利用し、それらの中での生起の様子から、係助詞「du」の統語的特徴について観察を行った。さらに、近隣の石垣島方言において報告されている現象と対比させながら、黒島の「若者ことば」の「が」の統語的特徴について述べた。

(4) 形容詞について

日本方言研究会第108回研究発表会において研究発表を行った。本発表では、以下のことを述べた。

一つの形容詞語根から二種類の形容詞が派生される。これは上に示した表3からも読み取れる。

“二つ目”の形容詞は比較の際に用いられる。具体的には、たとえば taka という形容詞語根であればこれからは takahata (「高かった」)・ takahariba (「高いから」) と takakuta (「高かった」)・ takakuriba (「高いから」) という二つの形容詞が派生されるということ、また、このうち takakuta のほうは「より高かった」という意味で用いられる、ということを示した。この二つの形容詞のかたちは、わずかな例外を除いてほぼ同じ活用を示し、また、統語的にもほぼ同じふるまいを示すことがわかった。このようなことは先行研究では指摘されていない。また、琉球諸語を見渡してみてもこのような現象はこれまでに報告されておらず、重要な報告と言える。一方、ku という要素を持つ形容詞は琉球諸語に存在するとの報告は以前からあるが、その分布について、新たな知見を示した。

<引用文献>

原田走一郎(2016a) 「南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音」『日本語の研究』12(4)

原田走一郎(2016b) 『南琉球八重山黒島方言の文法』 未刊行博士論文(大阪大学)
(<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/55692>)
平山輝男・大島一郎・中本正智(1967) 『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原田走一郎	4. 巻 5
2. 論文標題 沖縄県竹富町黒島方言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国方言文法辞典資料集（5）活用体系（4）	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原田走一郎	4. 巻 37-1
2. 論文標題 八重山語黒島方言の癖	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原田走一郎
2. 発表標題 南琉球八重山黒島東筋方言における比較形容詞
3. 学会等名 第108回日本方言研究会研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田走一郎
2. 発表標題 談話に見る八重山語黒島方言の形容詞
3. 学会等名 第107回九州大言語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田走一郎
2. 発表標題 八重山語黒島方言の格標示の概要
3. 学会等名 「AA研共同利用・共同研究課題 通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」発表会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考